

江戸時代、薩摩藩の藩境は取り締まりが厳しく、誰でも藩内に入ることができなかったという話を聞いたことがある人も多いのではないだろうか。しかし、実際には江戸時代に薩摩藩内の旅行をして、その記録を残した人たちがいました。

関所の通り方

江戸時代は270年近く続いた長い時代です。そのため、薩摩藩内に入りやすい時期もあれば、入りにくい時期もあったようです。

天明3(1783)年に薩摩藩内を旅行した岡山の医師・古川古松軒は「関所を通るときには、宿泊する場所や荷物などの中身を届け出なければならぬ」と記しています。この頃は金山などの採掘が盛んだったため、関所で「かなほり(金掘り)」と伝えると簡単に入れたようです。その場合は鉾山に入

行くことができなかったため、「旅行をする場合は修行者の格好をして、『水引新田宮(薩摩川内市・新田神社)、鹿兒島福昌寺(鹿寺)、(大隅)国分寺、正八幡宮(現・鹿兒島神宮)、霧島山を参拝するのが目的だ」と伝えると入れてもらえ、さらに藩から宿泊費用を半額補助してもらうことができる」とも記しています。

霧島を巡る旅

郷土史への扉で以前、取り上げたことがある江戸の講釈師・伊東凌舎の『鹿

川を過ぎて加治木の網掛川沿いの宿に泊まります。翌日、滝口坂を越えて小浜の茶屋で休憩し、日当山、安楽温泉を通っています。その途中に通った正八幡宮と宮内原用水については、歴史の記述もあります。

安楽温泉の湯治場へは、川を隔てた対岸に渡る必要があったようですが、橋や渡し舟がなく、川向こうの人を呼んで「半切り」に入って川を渡らなければならなかったようです。「半切り」は底の浅い飼葉おけのことで、広瀬の干拓潮遊池で行われる「はんぎり出し」

江戸時代、霧島の旅

児島ぶり』には、霧島市の江戸時代の様子がたくさん記されています。

特に正八幡宮での行事や、鹿兒島から霧島神宮の参拝と登山、湯治をして加治木から船で鹿兒島へ帰った記録は、とても興味深いものです。その内容の一部を紹介します。

凌舎一行は鹿兒島から吉野の牧、白銀坂、重富で昼食を取り、帖佐、別府

でよく知られています。当時の安楽温泉は、かなり秘境にあった湯治場だったのではないのでしょうか。

安楽温泉で宿泊した凌舎らはその後、犬飼の滝や稼原、曾於郡(霧島地区)に入り、霧島神宮の別当寺であった華林寺の宿坊である寿(集)福坊に宿泊しています。翌日には霧島登山をし、山頂では天の逆鋒を見えています。凌舎は

『鹿兒島ぶり』に天の逆鋒の挿絵を描いています。そこには「この鋒、手を掛けて動かせば動く」と書いているので、興味本位で触れてみたのでしょうか。

昔の旅人の手記を読んでもみると、当時の旅の様子がありありと伝わってきます。まだまだ興味深い話があります。今回はここまで。続きはまたの機会に紹介します。

(文責 坂元)



『鹿兒島ぶり』安楽川を半切りで渡る様子



『鹿兒島ぶり』天の逆鋒の挿絵

郷土史への扉

The gateway to local history